

城を建て、之を虎思斡^{フスオールド}耳朶と號し、こゝに康國と改元し、其の十年在位二十年にして没せりといふ。此の條は所謂西遼の建國と大石の死没の時とを記せるものにして極めて重要な記事なれども、然もまた殆んど據る可らず。

サルタン・サンジャー^{サンジャー}ールとの戦の後大石が更に自から西方に進みしことは、之を回教國の史籍に徴すべきなし(其の一將をしてホラズムを征せしめたる事は後述すべし)、思ふに起兒漫なる地は既にドギニユ氏ブレットシュナイデル氏等の考へたるが如く

(Deguignes : *ibid.* p. 253. note. Bretschneider : *ibid.* note 555) サマルカンドとボハラとの間なるケルマナー (Kermaneh or Carminiah) と見るべく、もとよりプラト氏 (Geschichte Ost-Asiens) の説けるが如き南方波斯のケルマン (Kerman) また丁謙氏の考ふるが如き波斯東境の給爾滿には非ず。然も此の戦後大石が此の地に於て葛兒罕の位に上りたりと認むるは、これ遼史の記事を過重視したるものにして取るに足らず。抑も此戦は上に記せるが如く一一四一年のことにして、大石がサマルカンドの地方に入りたるは此の時を以て初めとすべく、而して金の天會七・八年(一一三〇)の頃北庭に移りてよりこゝに至る迄實に十二二年間を経過せるものなりとす。されば此の間大石は、北庭とトランス・オキジアナとの間の地に於て其の行動を續けたるものにして、ツルキスタン地方の征略經營は全く此の期間に於けるものと見ざる可らず。これを史に徴するに、イブン・エル・アチルはグルカンが先づツルケスタンを服し、茲に税制を施き、部酋をして其の銀牌を帶ばしむるに至りたる後にマヴェランナールに進みしことを記し、ミルコンドも此の戦の前に既にグルカンがツルキスタン諸王の間に最も勢力を有するものなりしを記し、アライウド^{アライウド}ヂンも前記の如く、大石がベラサグンに入りて王位を占しこと (se rendit maître de trône) を述べ、更に續きて、「かくて COUN-KIDJIK より BARSERDJAN に至る間及び、TARAZ より TAMIDJ に至る間に於